

## 2. 古市場河岸と南久我原遺跡について

新河岸川は川越市伊佐沼付近に水源を発して川越台地（武藏野台地）の北東縁を流れ、柳瀬川、黒目川と合流して東京都北区赤羽の岩瀬水門で墨田川と合流する小河川である。かつて新河岸川は「九十九曲がり」と称されるほど蛇行していたため、過去に何度も改修が行われた。昭和初期の改修以前は川越市北東部の伊佐沼（流れ出た水は九十川となって合流）や川越台地縁辺にある湧水を水源とし、和光市新倉付近で荒川と合流していた。また、荒川が外川と呼ばれたのに対し、内川と呼ばれて江戸と川越地域を結ぶ河川の交通路として川越街道とともに重要な役割を果たしてきたが、後に鉄道網の整備されるにともなって衰退した。

新河岸川の名称は「河岸場」、「上新河岸」、「下新河岸」などの呼称や地名に由来すると考えるのが妥当であろうが、由来等が記述された文献は残されていない。文献に最初に登場する「新河岸川」は18世紀中頃以降であり、地元では最近まで「内川」と呼ばれていたことを考慮すると、「新河岸川」と「内川」の名称は併用され、後に「新河岸川」として名をとどめ、一般的には「内川」として語り継がれるようになったものと推察される。

第3図は現在の富士見市から川越市付近における新河岸川の旧河道、河岸場、渡し、水神宮などを示したものである。河岸場の多くは江戸時代に開設されたものであるが、明治時代になって開設されたものもあり、新河岸川流域では30箇所余りを数えるものと推定されている。「渡し」は河岸場付近や河川が蛇行して流れの緩やかな箇所に設けられていることが多い。いつ頃から設けられていたかは明らかではないが、旧河道との位置関係などからも現在の流れに近い状況に改修されてから設けられたものと推察される。「渡し」は伝承によると、主に対岸にある土地で農作業をする際使用されていたとされる。現在でもこの付近では新河岸川を挟んで土地を所有している人が多く見られ、「渡し」の性格を裏付ける傍証といえる。従って河岸場と「渡し」の関連性は薄いものと考えられる。また、新河岸

川流域には水神宮や大杉神社などの水難除けや水上の交通安全に関する社が数多くみられる。当時の新河岸川は水量が豊富で、水深や川幅も変化に富んでいたことから、水難事故や洪水などが多く発生していたとみられ、河岸場付近にこれらの神社が建てられたものと考えられる。

新河岸川の河岸場の始まりは、1638（寛永15）年1月16日の大火で焼失した川越仙波東照宮再建の際に江戸から建築資材を運ぶために寺尾村五反田においてのが始まりといわれている（寺尾河岸）。この頃の川越藩主松平信綱は、正保年間頃より新河岸川の整備に着手し、寺尾河岸に続いて新河岸を設けている。その後新河岸は上下に分割され、牛子河岸、扇河岸も加わって元禄の頃には川越五河岸と呼ばれ、城下町川越の外港として重要な役割を担うようになっていった。また、新河岸川の東側を流れる荒川には早くから老袋、平方河岸などの河岸場が開設されて川越藩の物流を担ってきたが、度重なる氾濫や渴水などにより次第に利用されなくなり、より川越城下に近い新河岸川の河岸場が繁栄していったものと推測される。初期の河岸場（川越五河岸）は、いずれも川越城の南約1kmの近接した地域に開設されているが、寺尾河岸に続く上・下新河岸、牛子河岸、扇河岸はより城下に近い場所を選んで開設されている。

川越五河岸は当初、川越藩関連の年貢米、炭、茶などを江戸へ運ぶことを主目的にし、問屋は御用商人たちの手に委ねられていた。しかし、相次ぐ河岸場の開設により、河岸場間の競争が始まり、廃業を余儀なくされる問屋も出て、寺尾河岸のように次第に衰退する河岸場も現れるようになっていった。その後寺尾河岸は百姓衆や新興の問屋が現れて、御用商人たちの手から新しい扱い手へとその性格を変え復興していった。

古市場河岸は川越五河岸で最も南にある寺尾河岸から更に南へ約1kmの新河岸川左岸に位置している。新河岸川（旧河道）の流れは和光市新倉付近で荒川と合流するまで概ね南東方向の流れを示すが、古市場付近

では大きく北東方向に蛇行し、再度南東方向に向きを変えている。この付近が古市場河岸や福岡河岸が開設された地点である。

古市場河岸の成立については諸説あるが、有力な資料の一つである「沢田茂一郎家文書」によると、1685(貞享2)年の「炭かよい帳」「炭送り帳」に古市場河岸の船問屋沢田加兵衛は下名栗村の御運上灰を飯能を経由して扇町谷街道を通り、古市場河岸から江戸へ運んだとの記録が残されている。また、加兵衛はこれより先だって1667(寛文7)年にも川越藩の年貢米を江戸へ回漕したとされているが、確証はなく、現在では貞享年間(1684~88)頃には古市場河岸が成立していたとみるのが有力な説のようである。加兵衛が運搬のために用いた陸上のルートは主に藩が物資の輸送のために使用するものであり、回漕した御運上灰はその名のとおり領主である川越藩や幕府に関連した荷にあたることから、古市場河岸の開設も川越五河岸と同様、川越藩が後ろ盾となっていた可能性が考えられる。また、当時の古市場村は江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によると戸数60、村の明細帳によると人口349人であったことがわかる。村の規模については中規模で、水田より陸田が多く、干害や水害に弱い地域とされている。沢田加兵衛については沢田家三代目で、当時古市場村の名主でもあったことから、当時の古市場村では最有力者であったものとみられる。船問屋としての加兵衛は御運上灰の他に主に飯能方面からの御運上炭、年貢米、薪なども取り扱い、1695(元禄8)年には江戸に「川越屋加兵衛」を出店させている。

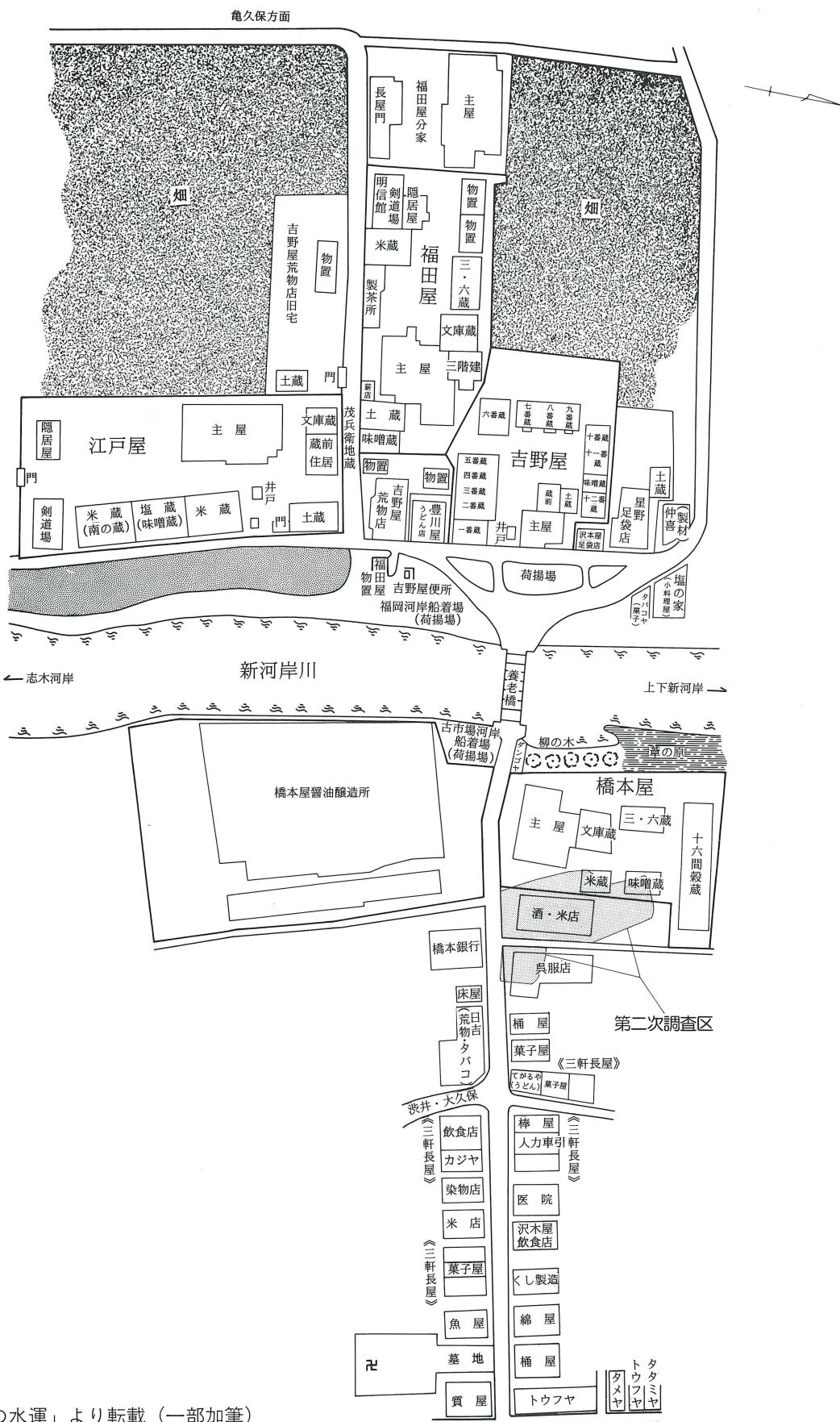
一方、古市場河岸の対岸は福岡河岸で、向かい合うような位置関係で河岸場が置かれ、両岸は古市場板橋(養老橋)によって結ばれていた。古市場板橋は新河岸川左岸の九ヶ村と川越藩を結ぶ要路に架かる橋で、架け替え、修復等に関しては隣接していた古市場村が九ヶ村を代表して世話をしていた。福岡村の福岡河岸には「吉野屋」「福田屋」「江戸屋」の三軒の船問屋が開設されている。いずれも開設されるのは享保年間(1716~36)以降であり、古市場河岸より遅れて成立

したことが明らかになっている。古市場河岸が川越藩などの御用商人によって始められたのに対して、福岡河岸は農民が農閑期を利用して回漕業を始めたことにはその出発点があり、両者には成立過程において大きな相違があった。従って福岡河岸では取り扱う地域や産物が農村を対象としており、主に三富新田付近の地域から野菜や薪を江戸へ送り、江戸からは肥やしや灰などを仕入れていた。

以上のように古市場河岸は福岡河岸に先行して17世紀末頃には成立して、主に川越藩の御用商人である沢田家によって発展していったことがわかるが、実態は不透明な部分も多い。その後、古市場河岸は18世紀末頃には沢田家を含む五軒の公認問屋となり、1830年頃には五軒の問屋は数字上は残るが、事実は一軒が廃業し、一軒が加わっている。その加わった一軒は三次郎(三九郎)といい、幕末まで残った唯一の問屋で、後の「橋本屋」とみられる。三次郎は沢田姓を名乗つており、古市場河岸を始めた沢田加兵衛の直系であることは明らかではないが、縁者とみられ、屋敷地を新河岸川沿いまで広げるなど、幕末頃には相当な資産家となっていたようである。文献には1869(明治2)年頃に「橋本姓」に改姓したとされているが、それ以前にも1796(寛政8)年の「現金酒之通」に橋本屋三次郎、1834(天保5)年の「酒買請申通手形」に橋本三次郎、1818(文政元)年の「諸職人覚帳」に橋本醤油店、1825(文政8)年の「糖船貨之帳」に橋本屋三次郎の名が見え、改姓以前にも「橋本」の名を使用し、酒販売・醤油の醸造・肥料販売などを手がけていた可能性が高い。また、1862(文久2)年の「土蔵普請入用帳」には橋茂登とあり、問屋が古市場板橋(養老橋)の袂にあったことに由来するような記載が残されている。その後、商家となった三次郎(沢田三九郎)は1866(慶応2)年の武州打ちこわしによって、沢田家(名主・11代加兵衛)らとともに居宅や倉庫などに相当な被害を被っている。

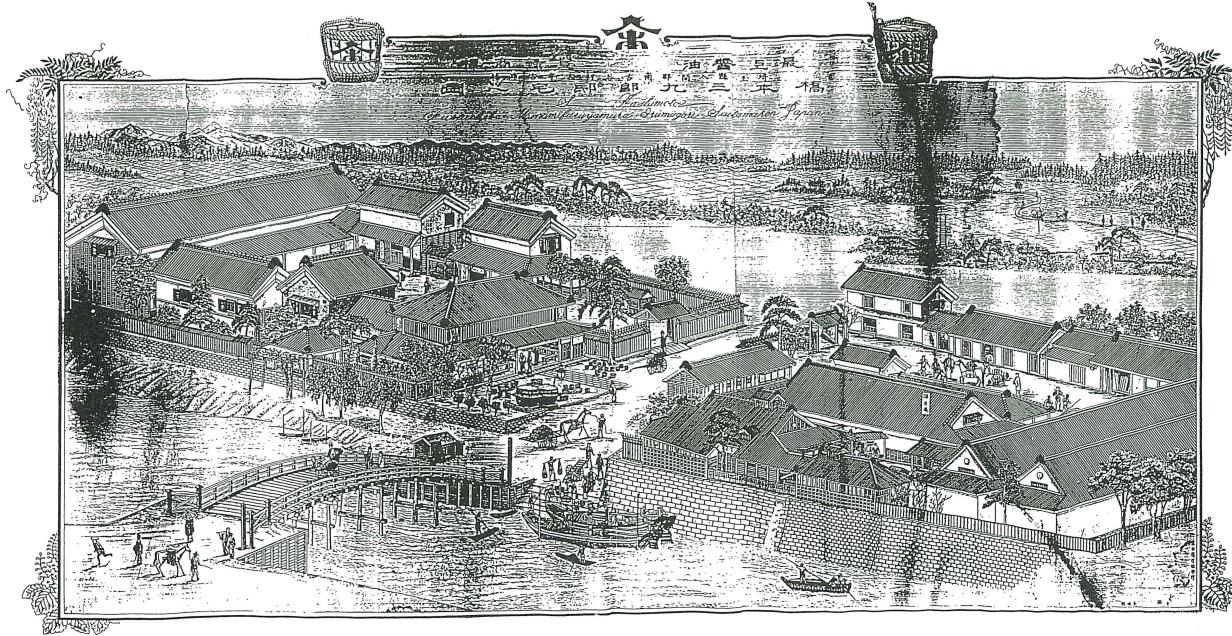
第4図は明治20~40年頃の福岡河岸と古市場河岸付近の町並みを聞き取り調査に基づいて再現した図で

第4図 福岡河岸と古市場河岸の町並み図（明治20年～40年代）



「新河岸川の水運」より転載（一部加筆）

第5図 旧橋本家之図（銅版画・川越市立博物館提供）



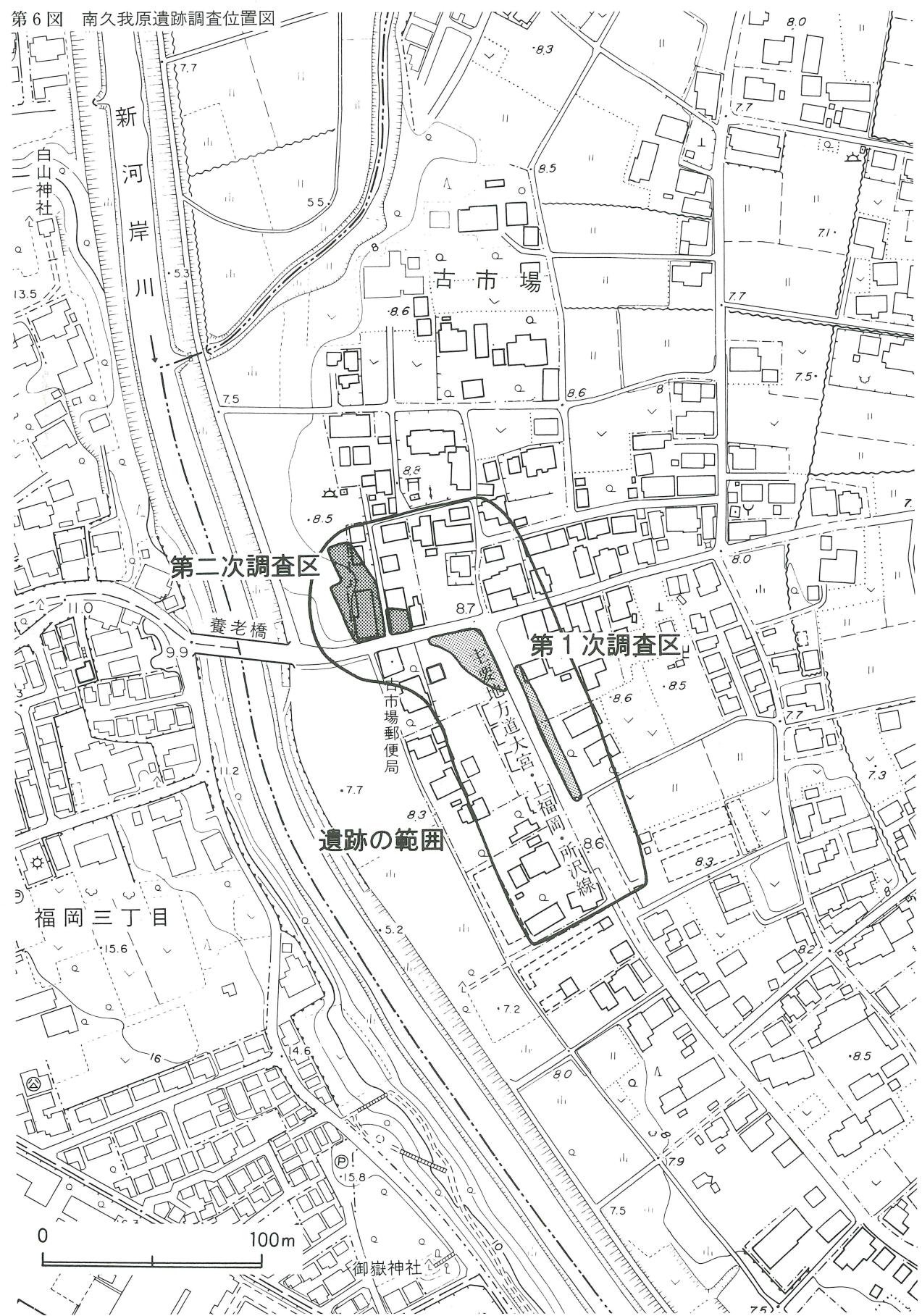
ある。この図によると福岡河岸には「吉野屋」、「江戸屋」、「福田屋」の船問屋が、古市場河岸には「橋本屋」という自家製の醤油醸造所をもつ問屋があったことがわかる。古市場河岸周辺の景観は菓子屋、鍛冶屋、桶屋、米屋、医院、質屋などの店舗が要路に沿って立ち並んでおり、当時の古市場村の賑わいがわかる。第4図中にスクリーントーンで示した南久我原遺跡第2次調査区は「橋本屋」の一部、酒・米店、呉服店の跡地に該当するものと考えられ、土壌内から出土した陶磁器類の一部は武州打ちこわし後に廃棄されたものであ

る可能性もある。また、第5図は明治20～40年頃の「橋本屋」の様子を示す銅版画である。養老橋に通じる道路を挟んで南側に醤油醸造所、北側に母屋が配置されている。母屋は主屋と大小複数の蔵から成り、奥には一六間穀蔵と呼ばれる長大な蔵が配されている。船着き場は養老橋の袂、醸造所脇に隣接して設けられている。また、この頃の「橋本屋」は橋本銀行を持つなど最も繁栄する時代を迎えていた。慶応2年の打ちこわしから20年余り後の景観であることを考えると、その復旧の早さを窺い知ることができる。

#### 引用・参考文献

- |           |      |   |
|-----------|------|---|
| 今井宏       | 1992 | 『伊佐島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第116集                  |
| 小野美代子     | 1998 | 『南久我原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第201集                 |
| 上福岡市教育委員会 | 1996 | 『沢田茂一郎家文書目録(1) 近世文書編』市史調査報告書 第10集             |
| 小暮貞作      | 1995 | 「新河岸川福岡河岸の開設」『きんもくせい』市史研究創刊号 上福岡市教育委員会        |
| 小暮貞作      | 1996 | 「新河岸川舟運 早船屋栄次郎父子の事績」『きんもくせい』市史研究第2号 上福岡市教育委員会 |
| 小暮貞作      | 2000 | 「新河岸川の舟運と河岸場」『上福岡市史』通史編上巻 上福岡市                |
| 埼玉県教育委員会  | 1987 | 「新河岸川の水運」                                     |
| 笹森健一      | 2000 | 「武蔵と倭王権」『上福岡市史』通史編上巻 上福岡市                     |

第6図 南久我原遺跡調査位置図



第7図 南久我原遺跡全体図

